

1. 幼児・児童における 未来型能力	必要な能力	「思考力」:分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である ≒「論理的因果的カテゴリー的思考」(J・ブルーナー)	「想像力」:経験していない事柄や現実には存在していない事柄などをこうではないかと推し量り、頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力。≒「ナラティブ的思考」(J・ブルーナー)
	なぜ未来型能力か？	ことばの発達とは考える力の発達である。ことばの力とは音声や文字として表現する力以前に考える力としてとらえなおす必要がある。考える力のうち「思考力」「想像力」が「言語を中心とした情報を処理する能力」のベースとなる。 ←二つの対照的な思考様式を用いて人間は生活をしている(J・ブルーナー)。 この二つの力がはぐくまれてはじめて「感じる」ことも「表す」ことも可能。	
	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	幼稚園教育要領・学習指導要領の分析、幼稚園・小学校の授業調査、先進校訪問。	文学的(情緒的)理解には、「想像力」が必要不可欠。 ←論理的理解を踏まえ、さらに情緒的に考えられるようになる(相手の思いや願いまでくみ取れるようになる)ことが、これからの社会でよりよく協同して生きることに繋がってくる。
	育成方法の提案	「説明」という言語活動を通じて身につける。 <小学校1・2年生> ・「事柄の順序」について考えること(論理的な説明の仕方の理解と活用) ↑ <幼稚園> ・「説明」の仕方を、「教師が的確に」「言葉で表現して」やる必要。 ・具体的な場面に即した、しかも「自分なりの言葉」のレベルでの「説明」の豊かな経験の積み重ねが必要。→小学校において抽象化され、一般的・普遍的な「説明」の仕方の理解に接続。 ・様々な体験が言葉で表現できるようになっていくことで、言語活動の根幹である「表現しようとする意欲」がはぐくまれる。  『この音なあに』:(幼稚園5歳児・小学校第1学年共通) <ねらい:幼稚園5歳児> ①箱の音や中身について、感じたり、考えたりしたことなどを自分なりに言葉で表現する。 ②箱を振ったりする経験をおして、音についての言葉のイメージを豊かにする。 <目標:小学校第1学年> ①箱の中身について考えたことを、根拠をもとにして順序よく説明する。 ②学習した説明の順序を用いて、自己の日常生活の適切な場面を説明する。	「絵本」などの文学的表現を読むという言語活動を通じて身につける。 【小学校1・2年生】 ・「場面の様子」について考えること(物語の構造の理解と活用) ↑ <幼稚園> ・本や絵本を読むことだけでなく、①ほかの子どもたちとの共同的な学び、②「物語」を演じることをとおしてはぐくまれる。 ・主人公への同化、対象化、典型化の3つのプロセスが必要。  『おおきなかぶ』(幼稚園5歳児・小学校第1学年共通) <ねらい:幼稚園5歳児> ・『おおきなかぶ』について、主人公に同化することによって親しみ、友達と協同しながら想像を広げていく。 <目標:小学校第1学年> ・『おおきなかぶ』の3つの場面の様子について、主人公の心情の転換をもとに想像を広げながら読む。
2. 幼児・児童における 未来型能力の育成	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		
	現状の把握 (調査・実験などの結果)		
	育成方法の提案	<教員向け研修指導案の作成> ことばの発達の連続性を教員に具体的に実感してもらえるように、小学校1年生と幼稚園年長児(5歳児)で同一教材を用い、指導過程の途中までは幼小とも流れを同じくし、途中から教育要領・学習指導要領をもとに発達の段階に応じて徐々に指導が異なるような指導計画を作成。	
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		
	育成方法の提案		